作文部2

文部科学大臣賞

生きた化石からのおくり物

庄内町立余目第四小学校六年
瀬川　隼矢

「二年前に飼育セットを買ったけど、育てられなかったな。」「生きた化石と言われているらしいけど、こんな所で見ることができるのかな。」「ほんとに見ることができるのかな。」「ほんとに見ることができたらおもしろいだろうな。」

母とこんな会話をしながら、ぼくは六月、庄内町で行われた「カブトエビから見る農地の生物の多様性」という観察会に参加しました。

まず、二億三千万年前の地層から化石が見つかったと言われるカブトエビについて説明を受け、いよいよ田んぼでの観察。田植えから一カ月ちょっとの田んぼには、堂々と成長した稲の苗がしっかり根をはっていました。

「そこだけちがうんでろ。」

という声。そう、他の田んぼの水はすんでいるのに、そこだけ土色にしっかりにごっているのが目に飛びこんできました。ぼくは、はやく見たくて田んぼの方へ走っていきました。

アメンボやカエルが泳いでいるのが見えました。もっとよく見ると、下の方から土をけちらすように、ひょこひょこ動いている物が見え、思わず手を伸ばしていました。それが初めて見るカブトエビでした。甲らの下で数十本の足をシャカシャカ動かしながら土の上をはい回るように泳ぐ姿に、ぼくは、すっかり夢中になってしまいました。

カブトエビが日本では、田んぼでしか見つかっていないこと、古代からほぼ同じ形で生き続けているのに、環境にはものすごく敏感なこと、でも「田の草取り虫」として稲作の手伝いをしてくれるのだということを知りました。説明を聞いてぼくは、このちいさな生き物が豊かな田んぼを示す指標として、庄内町一円に広がり、安心・安全な米づくりのシンボルになったらどんなにステキかと思いました。今のお米のルーツと言われる「亀の尾」をカブトエビ農法で育て、「古代からの恵みカブトエビ米」なんて売り出すのもおもしろいとどんどん夢が広がりました。

観察会の後、カブトエビを分けてもらい家で飼ってみました。水道の水では生きられないとか、水温が高すぎるとダメとかちょっと大変でしたが、卵を生む様子や脱皮を観察することができました。それに土や水を何より大事にする米作り農家の方の苦労をちょっぴり体験することができたような気がしました。

とうとうふ化するまではいけずにすべてのカブトエビの寿命が尽きてしまいました。田んぼの生き物とぼく達の生活が共に豊かになるようカブトエビが注目されていること、それに出会えたということは、ぼくにとって、かけがえのない体験でした。

ぼくはこの夏、自然と共存する豊かな米作りへ、夢と研究と苦労がたくさん積み重ねられているのを知りました。来年こそぼくも卵をかえし田んぼにはなしてみたいと思います。

文部作3

農林水産大臣賞

祖父の田圃から見つけた私の夢

鶴岡市立鶴岡第四中学校三年　石森　泉

「泉、今度の土曜、少連寺じっちゃん家さ田圃の手伝い行ぐぞ。」

夕食後、電話を受けた父が言った。それを聞いて家族全員の顔が引き締まった。今年も我が家の田圃のシーズンが到来したのだ。

今年の田植えは天候に恵まれ、春の陽を受け、水を張った田圃には金峰山がその姿を堂々と横たえている。静かだった田圃に、祖父の運転するトラクターのエンジン音が力強く鳴り響いた。今年も始まった。

作業は家族全員で分担して行われる。私と弟は苗をケースから外したり、そのケースを洗う仕事。これは見た目よりも重労働で、三十分もすると腰が痛くなってくる。案の定弟が弱音を吐いた。

「お姉ちゃん疲れた。」

「みんなが頑張っているんだから、ゆっくりでいいから頑張れ。うめぐなれ、うめぐなれと言いながらやれば疲れ忘れっぐら。」

この「うめぐなれ」は祖父の口癖だ。田圃の仕事をする時は呪文のように唱えながら祖父は仕事をするのだ。その話を弟にしてやると、弟も「うめぐなれ」の呪文を唱えながら作業に戻っていった。

午前中の作業が一段落して家族全員での昼食。汗を流した後で食べるおにぎりの味は格別だった。家族の誰もが笑顔だった。その後も田植えは順調に進み、夕方にはすべてが終了した。体の芯まで達する疲れ、それでいて、気分は爽快だった。田植えが終わった田圃は緑の絨毯のようになり、そこに春風が渡っていった。さっき植えたばかりの苗が揺れていた。それを見た瞬間、やったという充実感で胸がいっぱいになった。

帰り際、私に、突然祖父が尋ねた。

「泉、田圃の仕事好きだが。家にはじっちゃんの後継いで田圃やる人間はいね。泉にじっちゃんの田圃やるから、泉が田圃やってくれ。」

そう言った祖父は寂しそうな目をしていた。

今日本の農業従事者は減少の一途をたどっている。農業従事者の高齢化も進み、後継者不足が大きな問題となっている。祖父の家の抱える問題は、日本社会全体の課題となっている。祖父のような六十五歳以上の就農者数の割合も非常に高く、このまま進むと日本で農業をする人がいなくなってしまうのではないかと心配になる。日本の主食である米を、日本で作る人がいなくなってしまうのだ。それも、そう遠くない未来に。

私はこの五月に実施された職場体験で、農業を選択した。百五十人いる生徒の中で農業を選択した人はたった二人。この現実は日本の農業の現実なんだと改めて思い知らされた。体験先での仕事はメロンの草取りで、三日間明け暮れた。

「こんな仕事しかなくて申し訳ねえの。でも、農業やるからにはこの草むしりだけは欠かせねなやの。しっかりやっど、うめメロンさなっから。」

体験先の方がおっしゃったこの言葉に私ははっとさせられた。農業は収穫時が最高の喜びとなるが、それまでには根気のいる仕事が延々と続く。祖父は一人でその根気のいる仕事をこなしている。私は米を作っていると友人に自慢していたが、田植えと稲刈りといった米作りの一番おいしいところだけの手伝いだったのだ。

中三の私は進路を考える時期になっている。米作り農家になるという漠然とした夢が少しずつはっきりとした目標になりつつある。私は将来米作り農家をしてみたい。そして、日本一おいしい米を作ってみたい。

今、祖父の田圃ではぎっしり詰まった稲が黄金色に輝き、頭を垂れてきている。もうすぐ稲刈り。今年もおいしいお米が育っていますように。

■山形県知事賞■

がんばったなえばこあらい

大石田町立大石田小学校二年　寺嵜亜寿美

わたしは、ながとろのばあちゃんのうちに田うえの手つだいをしにいきました。でも、きかいで田うえをしていたので、しごとがありませんでした。いとこのおかあさんに、何をするといいかきいたら、なえばこをあらうしごとを教えてくれました。

はこには、なえのねっこがへばりついていたので、なえのねっこって、こんなにいっぱいあってすごいなぁと思いました。このはこに入っていたなえは、元気がよく、はっぱがやわらかくて、きもちがよかったです。こんなに元気がいいのは、ねっこがいっぱいあるからなんだと思いました。なえが田んぼにうえられて、もっと大きくなって、いっぱいおこめがなるといいなと思いました。

わたしは、田んぼのわきのそっこうにいって、はこにへばりついていたねっこをとって、ブラシであらいました。田んぼには入っていないけど、田んぼの中には、アメンボやカエルがいっぱいいました。ヒルもいて少し気もちわるかったです。はこは、いっぱいあるので、休み休みやって、いっぱいあらいました。手がいたくなってきたけどつづけてやったらまめみたいなものができていました。

ようやくおわったら、ちがうたんぼにいってまた、しごとをしました。はこをちゃんとあらって来年つかうのだそうです。田んぼのしごとは、いっぱいあるんだなと思いました。

「よく、がんばったね。」

とばあちゃんがいってくれたので、うれしかったです。大へんなしごとでした。

ばあちゃんのうちで、ごはんを食べました。ばあちゃんたちが一生けんめいつくってくれたおこめをのこしてはいけないと思いました。おこめは、カレーにもやき肉にもどんぶりにもぴったりなので、すごい食べものです。心をこめてつくっているから、おこめはおいしくなるんだなと思いました。

■山形県農業協同組合中央会会長賞■

ぼくはこめとぎマン

鶴岡市立朝日小学校一年　佐藤　流偉

シャカシャカシャカ、ギュッギュッギュッ、ジャーッ。だいどころからおもしろそうなおとがしてきました。みにいったら、おかあさんがこめとぎをしていました。じっとみていたらかんたんそうだったので、ぼくもちょうせんすることにしました。

おかあさんにおしえてもらいながら、シャカシャカ、ギュッギュッ、クルッ。もういちどギュッギュッ、ジャーといきおいよくみずをながしたら、バラバラバラとこめつぶがながれてしまいました。するとおかあさんが、

「一ねんかけて、おじいちゃんとおとうさんががんばってつくっているおこめをむだにしちゃだめでしょ。」

といいました。ぼくはいそいでこめつぶをひろいました。そして、

「あしたは、ちゃんとうまくやるから、またやらせて。」

とおねがいしました。

つぎのひのよる、もういちどこめとぎにちょうせんしました。こんどはこめつぶがながれないように、シャカシャカ、ギュッギュッ、シャーッとしずかにみずをながしました。おかあさんが、

「きのうより、うまくできたね。るいはうちのこめとぎマンだね。」

とほめてくれました。ぼくはちょっとうれしくなりました。

あさ、みんなに、

「きょうのごはんはぼくがといだこめだよ。」

といったら、おおきいおじいちゃんが、

「おお、んだがあ、いっつもよりおいしいよ。」

といってくれました。とてもうれしかったです。ぼくはいつもよりもりもごはんをたべました。

またこめとぎマンにへんしんして、みんなにおいしいごはんをたべてもらうぞ！

■山形県知事賞■

お米の大切さ

庄内町立余目第一小学校四年　工藤　暢晃

「見回り、行てくっが。」

けいじじちゃんは、雨の日も風の強い日もお酒によった日もわすれずに田んぼを見回る。水を調整したり、いねが病気になっていないか、毎日注意して見ている。それに、新聞やテレビをよく見て、天気や気温、日の出、日の入りの時こくを調べて、毎日、日記に書いている。もとたてのけいじじちゃんは、はえぬき、ひとめぼれの米づくりの名人である。ぼくの家でも、けいじじちゃんのお米を食べている。

けいじじちゃんの家に遊びに行った時、ぼくがパンを食べていたら、

「パンかねで、米け。」

と言った。ぼくが

「どうして。」

とたずねると、

「米、余て困る。せっかぐ、いっしょうけんめい農家の人がつぐったなさ。日本人は米くわねば、だめだ。」

と言った。お米を作るのに、農家の人たちは八八回も草をとったり消毒したり、こやしをやったり土をたがやしたりして世話をする。だから「米」というそうだ。

ぼくが、三月にけいじじちゃんの家に行った時、さむいくらの中でたねまきをする土作りをしていた。四月には、親せきじゅうが集まってたねまきをした。ぼくも、そね運びを手伝った。けいじじちゃんは、ハウスのなえがかれないように毎日毎日注意して見た。五月は、気温のひくい日が続いて、とても心配したそうだ。米づくりを始めていらい、初めてハウスでストーブをたいたそうだ。大事に大事にそだてたなえが田んぼに植えられた時、けいじじちゃんの心の中もほっとしたことだろう。一面が緑のジュータンのようになえが風になびくまで、けいじじちゃんの世話は続いた。

ぼくのお母さんは、一面緑の田んぼと黄金になみうつ田んぼの風景が好きだそうだ。今年は特に暑い日が続いている。黄金の田んぼになるまで、けいじじちゃんの戦いは続いている。

「日でりが続くと、庄内平野は冷害の時より米のしつが落ちんなやの。」

けいじじちゃんは今年の米の出きばえを心配している。

いい米ができるように、暑い日も重い農薬を背おって病気にならないように消毒したり草とりをしたりしてがんばっている。

夏休み、けいじじちゃんの田んぼのいねもほが出て、たれてきていた。おいしい米ができるように、ぼくも田んぼに向かって手を合わせた。

ぼくはごはんを食べるときよく

「米どご、そまつすっど、目見えねぐなる。」

と言われる。それは、けいじじちゃんや農家の人の世話をそまつにしてはいけないという意味だ。一粒一粒かみしめて食べたいと思った。

■山形県農業協同組合中央会会長賞■

おじいちゃん、また作るからね

鶴岡市立朝日小学校六年　菅原彩花里

グォーン、グォーン、グォーン……。ゆっくりだった機械の音が、出来上がるにつれて、速くなる。台所は、ほのかに甘い餅米の香りでいっぱいだ。いつものように、おばあちゃんが餅つき機をのぞきながら、つき上がりを見定めている。

「でぎだぞぉ。」

おばあちゃんの声で、家族みんながテーブルに集まる。お父さんにお母さん、私と妹のゆうあだ。おばあちゃんがちぎったあつあつの餅をみんなで丸め始めた。何個か作って並べていると、

「彩花里、うまぐなったのぅ。」

と、おばあちゃんがほめてくれた。

「うん、おじいちゃんから教えてもらったから……。」

おじいちゃんは、わたしが四年生の時の二月に病気で亡くなってしまった。わたしは、おじいちゃんが大好きだった。役場など、ふだんは行けない所に連れて行って

くれたり、一緒に山に行って山菜やカタクリの花を採ってくれたりもした。おじいちゃんは、我が家の米作りを、一手に引き受けていた。毎日、朝早く起きては、田の水を見に行き、わたしが起きるころにはもう帰って来ていた。おじいちゃんが育てたあきたこまちは、白くてつやつやしていて、食べるともちもちで、とてもおいしかった。おじいちゃんは、餅米作りも上手で、おじいちゃんの餅米で作る年三回の餅つきは、わたしの楽しみの一つだった。

　わたしに餅の丸め方を教えてくれたのは、おじいちゃんだった。低学年のころ、わたしが丸めると、よく変な形になってしまった。そんな時、いつもおじいちゃんが、やさしく教えてくれた。

「こうやってやっど、うまいぐ丸ぐなっぞ。」

と、手のひらで、くるくる回して丸くした。おじいちゃんの大きな手の中で、ふにゃふにゃの餅が、白い真じゅになった。

　おじいちゃんのついた餅は、冬にストーブで焼いて食べてもおいしかった。まきストーブで焼くと、ゆっくり焼き上がるので、妹と、

「もち、まだぁ？」

と聞きながら、何回もひっくり返した。だんだんふわっとふくらんできて、しょう油をつけて、のりではさんで食べると、とってもおいしかった。おじいちゃんは、砂とうじょう油をつけて食べていた。わたしと妹が、

「餅、うめぇ。」

と言うと、おじいちゃんが、

「んだろう。自分でついだ餅はうめんだや。」

と教えてくれた。

　今年、わたしが丸めた餅は、お父さんに負けないぐらいの出来映えだ。（おじいちゃんのおかげで、こんなにうまくなれたよ。うめはげ食っての。この次は、もっとうまくなるから。）と、わたしは静かに仏だんの前で両手を合わせた。

■山形県知事賞■

愛情を持って

朝日町立朝日中学校三年　小野　茜

私が朝起きて最初に口にする物は、ほかほかに炊けたご飯だ。ご飯を食べると、自然に体いっぱいの元気が出てくる気がする。

その活動力の源を作ってくれているのは、私の祖父母だ。祖父母は毎年、大きな二つの田んぼでたったの二人で作業してお米を作っている。稲が大きく育つ夏の間は、家の横にある畑でナスやトマトなどの野菜を作り、さらにさくらんぼ、いちご、りんごなどの季節の果物を作る。こんなにたくさんの種類の食べ物を作るなんて、まさに「なんでも屋」のような存在だ。私は母がスーパーでお米を買っている所を見たことがない。なぜなら、祖父母が毎年お米を作ってくれているからだ。

小学校四年生の時、私は初めて米作りがいかに重労働かを知った。秋の休日のある日、

「茜、稲刈りの手伝いすねが。」

と父が誘った。退屈していた私は、すぐに父の誘いにのって、長靴を履き軍手をはめて家を出た。よく晴れた空には、赤トンボがたくさん飛び交っていた。着いた時にはすでに稲を刈る作業は終わっていて、田んぼ一面に刈られた稲が向きをそろえて並んでいた。

「茜、稲干すの手伝ってけろ。」

と祖母に言われ、一緒に稲をまとめて田んぼに刺してある棒に積み上げていく作業をした。稲を束ねる作業はとても難しかった。稲をまとめて束を作り、稲数本をひもの代わりにして結ぶ。私は、結ぶ時稲をあらゆる方向にねじったりするのが難しくて苦戦した。

「ばあちゃん、これどうすんの。」

と何度も聞いて教えてもらった。教えてもらった時の祖母の手の動きはとても素早くて、まさに早技だった。私は見よう見まねでなんとか稲を束ねて積み重ねていった。一時間ほどで作業は終わり、私は田んぼの半分くらいしか手伝っていないのに足が疲れ、へとへとになってしまった。でも、

「おぉ茜、手伝い来てけだのがぁ。」

と祖父が笑って喜んでくれたのが嬉しかった。私はたったの一時間で疲れてしまったのに、祖父母はこの作業を一日中しているのだということを考えると、本当に頭が下がる思いがした。家でおいしく食べているお米や果物は、二人の努力の下にあるものだと思った。

私の家には、よく親戚が泊まりに来る。その時は、必ずご飯と祖父母が育てた野菜を使った手伝りのおかずをごちそうする。すると、泊まりに来た方は必ず、

「本当にうまいなあ。」

と言ってくれるので、とても嬉しい気持ちになる。もし私が、自分一人で一から米を作っていたとしたら、おいしいと言われれば（頑張って作って良かった。）と心から思うだろう。祖父母は、食べてくれる人に「おいしい。」と言ってもらうために一生懸命米作りをしているのだと思う。祖父母が作るお米は、おかずがなくても食べられるくらい味に甘みがあっておいしいし、時間がたってしまっても柔らかい。毎日昼食に持っていくご飯は、冷たくても味は炊きたてと変わらない。そんなお米が、私の家の一番の自慢だ。

小学校五年生の時、バケツに苗を一株だけ植えて育てる「バケツ稲」をした事があった。自分で苗を植えたり、水をかけてあげたりすると、自然と自分の稲に愛着がわいて、丈夫に育ってほしいと心から思った。祖父母も、毎年毎年自分たちの田んぼの稲に愛情をもって育てているのだろうと思った。

近頃、祖母は

「腰痛（いたい）。」

と辛そうな顔をしながらつぶやくようになった。きっと毎年の農作業で疲れているのだろう。今年ももうすぐ稲刈りの季節が来る。今年は久しぶりに稲刈りの手伝いをして、祖父母の手助けをしようと思っている。「いつもおいしいお米や果物を食べさせてもらってありがとう。」と恩返しをするためにも。

■山形県農業協同組合中央会会長賞■

自然の中で生きる

朝日町立朝日中学校三年　菅井　澪

私の家は農家です。主にお米とりんごを作っています。小さい頃から田や畑での手伝いが好きでした。自分のためになるといわれ楽しくやっていました。好奇心もあって畑で手伝いをしながら、葉っぱでよく遊んだことを覚えています。

でも、今はその好奇心も薄れ、親が助かるということだけで手伝いをしています。

「澪、ちょっと来て手伝って。」

と額に汗をにじませ懸命に仕事をしている母が外から呼びかけても、

「えっ、今無理。」

と素直に動けなくなった自分の姿に気づきます。しかし、土・日曜日だけはりんごの葉摘みや玉返しなどの手伝いを、半分面倒臭いと思いながら続けています。小学生の頃は手の届かなかった枝にも手が届くようになって、父母達の大きな助けになっているようなのです。

そんな私が今年初めて田植えに挑戦しました。父や母の作業する様子を見ていて、

「なんだ簡単だ。」
と思ったのですが、田の中に入ってみると全く動けず、
「歩かないと、どんどん沈んでくぞ。」
と言われ、沈んではならないと足を前に出しました。けれど足が沈んでとれなくなってしまい、手をついてとろうとしました。しかし、そこは田の上。手までズポズポと入って感じたことのない感触を体験しました。田からあがり、上から田を見ていました。さっき田に入った手から温かい土の香りがして、なつかしい気持ちになりました。

田植えができて、うれしかった春。しかしその後、田の様子も見ず、稲の成長具合の話にもほとんど加わりませんでした。あんなに小さくて細い苗からどのくらい成長したのか……。学校に行く途中で他の家の田を見ますが、何も考えず通り過ぎる毎日でした。自分の家の田は、近くにあるけれど通学路ではないので通ることもありません。その田の近くにりんご畑があり、時々手伝いに行きますが、田まで行くことはありませんでした。その日の手伝いが終わって家に着くと、父が、
「あっ、水見てくるの忘っだ。」
と言い、田の水を見に行きました。時々田に水をやりに行っているのは知っていました。夜や早朝、水をやったり、止めたり、しっかり調整しているのです。

九月の休みの日、久しぶりに田を見に行きました。すると、とてもなつかしい稲のいい香りがしました。稲は、いつのまにか膝ぐらいの高さになっていました。青々とした葉先がかすかな風でサワサワと揺れ、きれいな音を出していました。今年も台風があったのに、稲は一本も斜めになっておらず、たくましく育っていたのです。こんなにも稲が丈夫にきれいに育っているのも、いつも水をやってくれている父や祖父のおかげだと思いました。今年はとくに暑い日が続いて、水の管理や調整が大変だったと思います。いつもしっかり水をやってくれている、父や祖父のことを考えながら食べるご飯は格別でした。

私は今、おいしい米を作ることができるようになりたいと思っています。いろいろと自分の進路を考えるうちに、自然という大きなものがいいと思うようになりました。小さい頃から住んでいる自然の中で暮らすことが、幸せだと思うようになりました。前は田舎はいやだと思っていました。都会の方が便利で楽だからです。でも都会で食べられないものが田舎にはあります。都会の会社で働くのは格好良さがあるけれど、私は自然の中で暮らす農家になりたいと思っているのです。おいしい米をたくさん作って、自然の中で学ぶことや広い空の下で感じたことを、たくさんの人々に教えていきたいと思っています。